

写経、読経、遍路みち



「人もし、修証するに得一法 通一法なり、遇一行 修一行なり、」
と道元禅師が声高らかにお諭ししています。

現代文に訳してみますと、

「人が安心の道を実修実証するというは、一事に専念し自己と事が一体になる、「空」を得たならば、一切の諸事は「空」に通じます」と、
「汚れに染まらない一事一行を手にしたならば、一切の行が無心を修します」となります。職人の世界にしても、野球選手のイチロウの世界にしても、
究極を手にした方は、禅僧の指針に共通しています。

今、四国の八十八ヶ寺の遍路旅にしましても、写経 読経にしても、
一つのことには全身心、渾身を尽くしていますと、

「ただ、ただ・・・」の行になり

「得一法、通一法 遇一行、修一行」

が実施した方の手に入るのです。

この「ただ、ただ」が佛行であり、

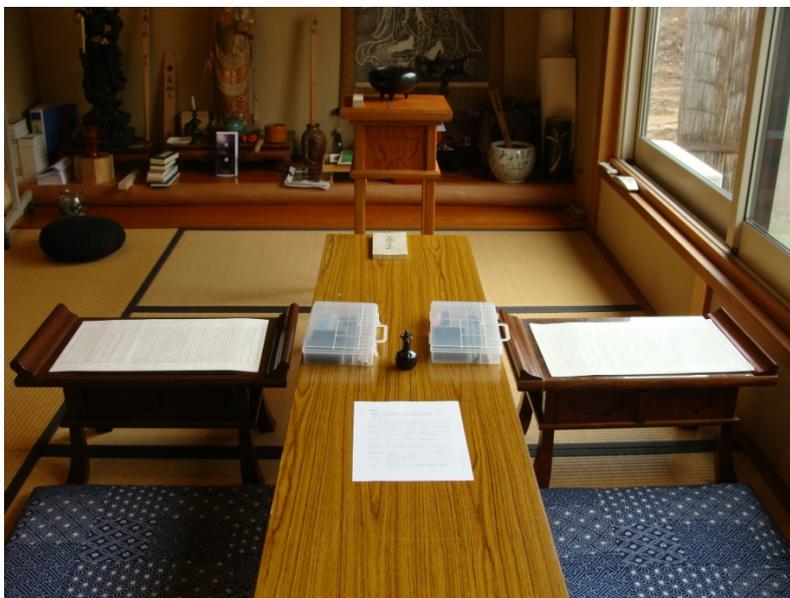
佛道修行の眼目です。

これをやったから「御利益がある」との目標を持った行いは、
一切外道の道であり、佛の教えにはなりません一事が一切行にして、

「諸縁が投げ捨てられ」

安心への関門が開かれるのです。

写経を始めましょう



お部屋から騒々しい音を無くします。
テレビを消し、ラジオ消し、話声等、日常の生活音から離れ
香の良い線香を立てます。



机を前に合掌礼拝し

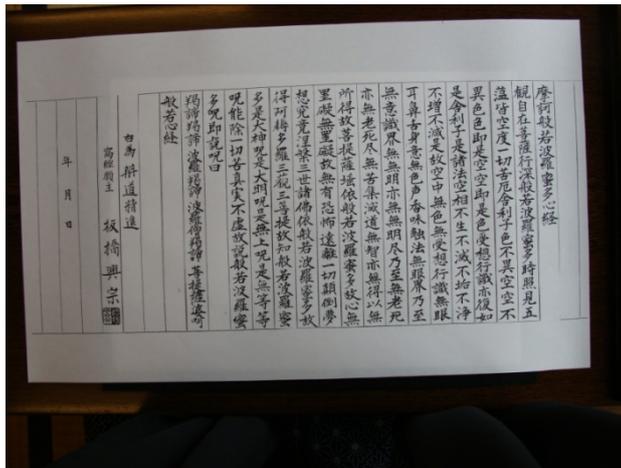
両手の掌の隙間に自己の温もりを感じ、
その温もりが「あなたのいのち」のあかしです。
姿勢を正し、



硯に水を注いで墨をすること 15 分。
ただ一心に墨をすります。
この一心の動作が佛行の一時です、
この単調な動作の中に、頭の妄想が薄らぎ、
なみ かぜ が取り除かれます。



墨がすり上がったら写経の台紙を用意し、
写経用紙を上へのせ、



一画入魂

足も手も脊髄一切を尽くし、
書き始めます。

線香の香に包まれるまま、
眼が有りながら眼が無く
耳がありながら耳が無く
無眼耳鼻舌身意を筆の走りに任せます。



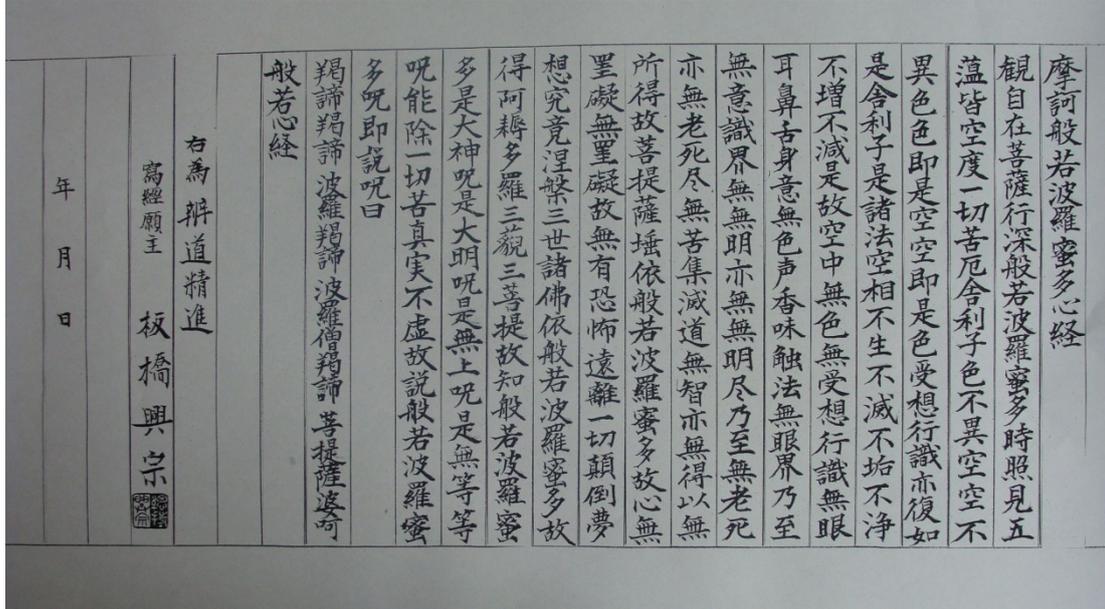
回りを気にせず、自己没入



自己現成の一時に染まり尽くします。

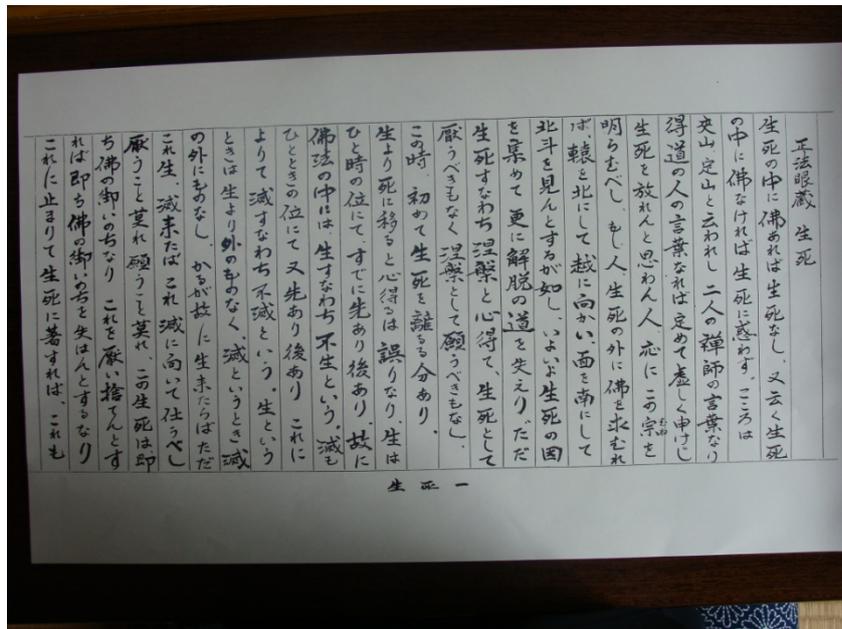
写経 台紙

摩訶般若波羅蜜多心經

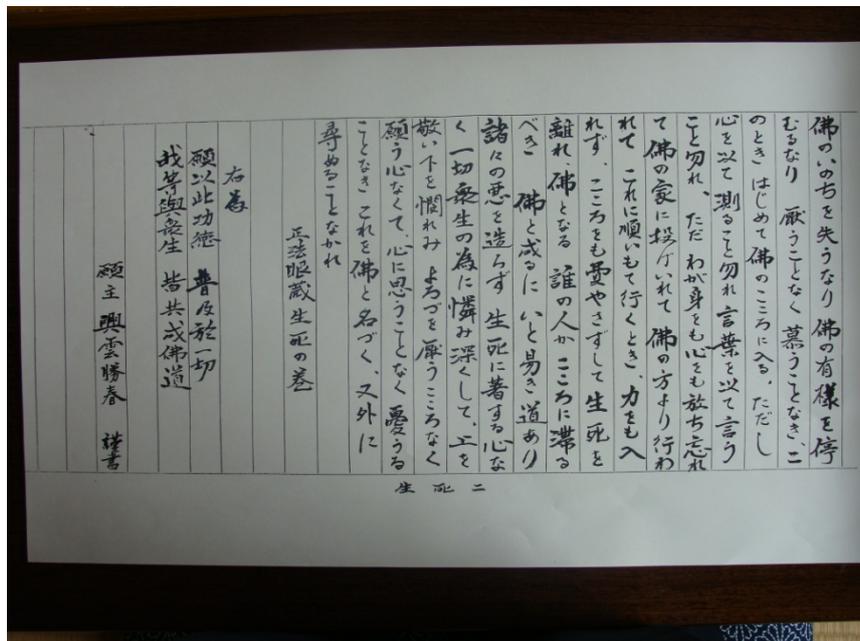


この台紙は、わたしが石川県金沢 大乘寺で修行していた時、板橋禪師に頂いた「摩訶般若波羅蜜心經」です。私の本師にあたるお方で、興雲寺の開山さまに当たられます。今から14, 15年前のことでしょうか？
 禪師様が心臓発作で入院された時、自己を見返り、お寺を想い、修行僧を思い、一心不乱にお書きになられた心經です。

正法眼蔵・生死一



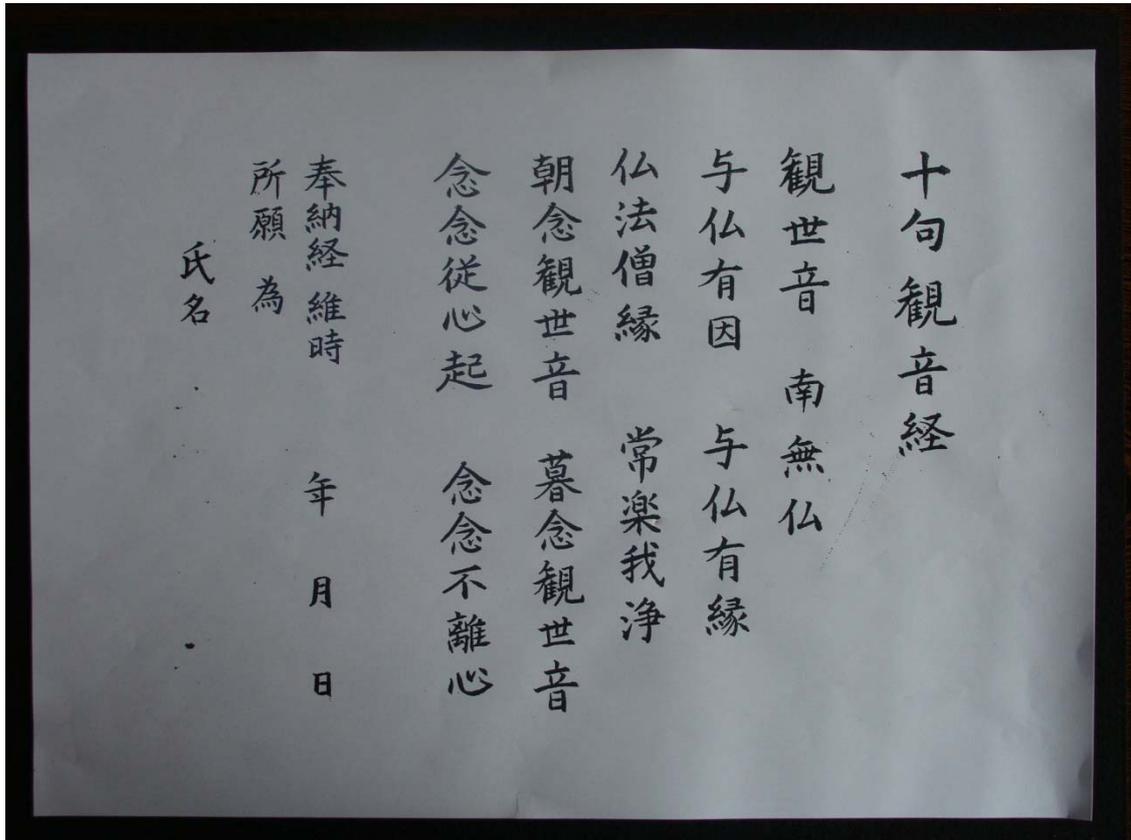
正法眼蔵・生死二



道元様がお示しの正法眼蔵・生死です。

開祖様の人間観、人生観、生き死にの根幹を示された一文です

延命十句観音経



常・楽・我・浄の四点が人生の落とし穴になります。

無常を常と思い、

苦を楽と思い

無我を我と思い

不浄を浄と錯覚しています、

これが四顛倒です。

正法眼蔵・道心一

正法眼蔵 道心
 佛道を求むるには、先づ道心を先とすべし。道心の有りよう知る人稀なり、明らかたに知らん人に問うべし。世の人は道心ありと雖もまよふに道心なき人あり、真に道心ありて人に知られざる人あり、斯くの如くありなし。知り難し、大方愚かに悪しき人の言葉に信ぜず、聞かざるなり、亦吾が心と先とせられ、佛の説かせ給ひたる法と先とすべし。よくよく道心あるべき様を、夜、昼、常に心に掛けて、この世に如何にかまことの菩提ありましと願ひ祈らばし。世の末には、まことある道心者、大方なししかあれども、暫く心を無常にかけて、世のほかなる人のいふ方の危うきことを忘れざらるべし。吾は世のはかなきことを思つと知らざるべし。合に構えて法を重くして、わが身、わがいのちを軽くすべし。法の為には、身もいのちも惜しまらばし。
 次には、深く佛法僧三宝を敬い奉らばし。生と交へ身をかえても、三宝を供養し、敬い奉らんことを願うべし。寝ても醒めても、三宝の功徳を思い奉らばし。寝ても醒めても、三宝を唱え奉らばし。たとえこの生を捨て、また後の生に生れざらん。その間、

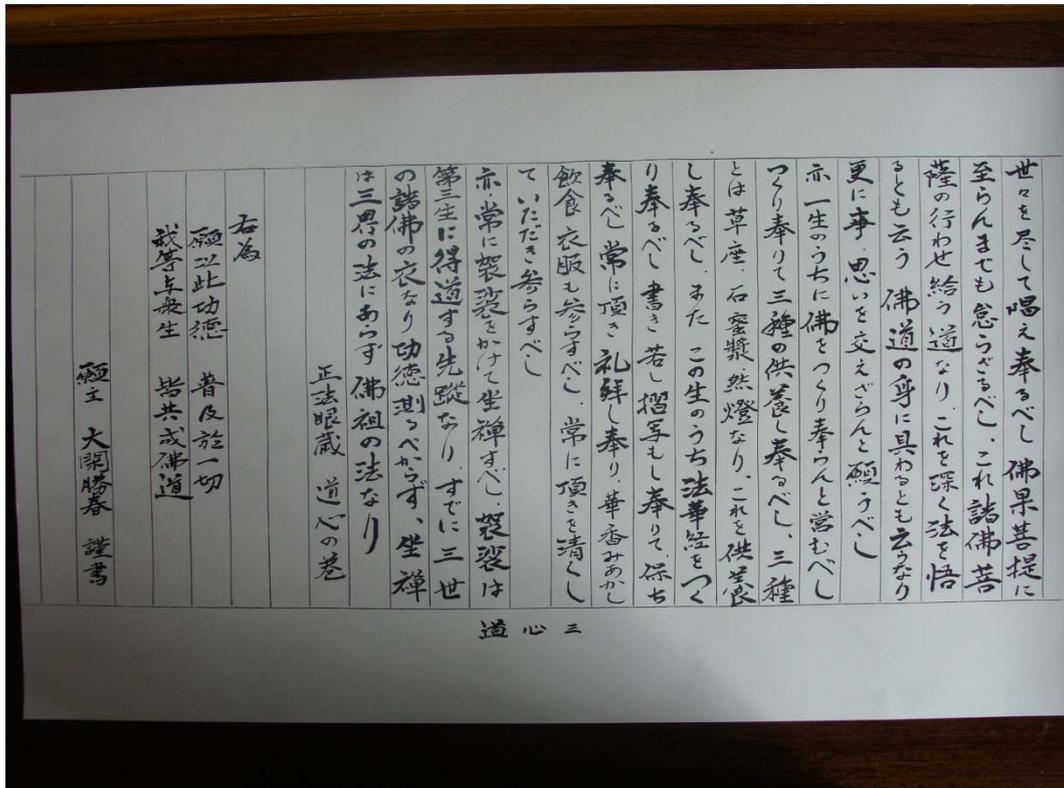
道 心 一

正法眼蔵・道心二

中有と云ふことあり、そのいのち七日なる。その間も常に言も止まず、三宝を唱え奉らんと思つべし。七日を経れば、仲有にて死して、また中有の身を受け、七日あり。如何に久しと云えども、七日とば過さず、このとき何事を見聞くも障りなきこと、天眼のごとし。かからんとき、心を勵まして、三宝を唱え奉り、南無帰依佛、南無帰依法、南無帰依僧と唱え奉らんことを忘れず、暇なく唱え奉らばし。すでに中有を過さず、父母の辺に近づく間、合に構えて、正智ありて、託胎せん如胎蔵に在りても、三宝を唱え奉らばし。生まれおちんときも唱え奉らんことを怠らざらん。六根に經て、三宝を供養し奉り、唱え奉り、歸依し奉らんことを深く願うべし。またこの生の終るときは、二つの眼をたまちに暗くならばし。その時をすでに生の終りと知りて、勵みて南無帰依佛と唱え奉らばし。このとき十方の諸佛あわれみを垂れさせ給う縁ありて、悪趣に赴くべき罪も、輕じて天上に生まれ、佛前にうまれ、佛を拜み奉り、佛の説かせ賜う法を聞くなり。眼の前に闇の来らんより、後は弛まず、勵みて三歸依を唱え奉ること、中有までも、後生まても怠らばかず。斯の如くして、生々

道 心 二

正法眼蔵・道心三



「道心」の巻は、お腹の大きい参禅者（妊婦さまとその家族）の方々に写経をすすめています。

出産後、3、4ヶ月後に納経して頂き、そのときに「赤ちゃんの発育祈禱と家族安泰の祈禱」のお勤めをし、御宮詣りの風習をお寺でいたします。

大変「ご利益がある」と、評判になっております。

信仰の芽吹くところ
不健全な家庭になるはずがありません。
毎朝坐禅の功德です。

普歡坐禪儀 一

普勸坐禪儀

原夫道本圓通爭假修證宗未自在何費功夫況乎全體迴出塵埃乎孰信拂拭之手段大都不能當處乎豈用修行之脚頭者乎

然而毫釐有差天地懸隔違順違起紛然失心直饒誇會豈悟兮獲悟地之智通得道明心兮拳衛天之志氣雖逍遙於入頭之邊量幾虧闕於出身之活路矧彼法園之為生知兮端坐六年之蹤跡可見少林之傳心印兮面壁九載之聲名尚聞古聖既然今人盡辨所以須休尋言遂語之解行須學回光返照之退步身心自然脫落本來面目現前欲得恁麼事急務恁麼事夫參禪者靜室宜焉飲食節矣故捨諸緣休息萬事不思善惡莫管是非停心意識之運轉止念想觀之測量莫圖作佛豈拘坐臥乎

尋常坐處厚敷坐物上用蒲團或結跏趺坐或半跏趺坐謂結跏趺坐先以右足安左脛上左足安右脛上半跏趺坐但以左足壓右脛矣寬繫衣帶可令齊整次右手安左足上左掌安右掌上兩大拇指面相拄矣乃正身端坐不得左

普勸坐禪儀 一

普歡坐禪儀 二

側古傾前躬後仰要令耳與肩對鼻與臍對古掛上脛唇齒相著目須常開鼻息微通身相既調欬氣一息左右搖振兀兀坐定思量箇不思量底不思量底如何思量非思量此乃坐禪之要術也

所謂坐禪非習禪也唯是安樂之法門也究竟菩提之修證也

公案現成羅籠未到若得此意如龍得水似虎靠山當知正法自現前昏散先撲落

若從坐起徐徐動身安祥而起不應卒暴嘗觀起凡越聖坐脫立亡一任此力矣况復拈指竿針鎚之轉機舉拂拳棒喝之證契未是思量分別之所能解也豈為神通修證之所能知也可為聲色之外威儀那非知見之前軌則者歟

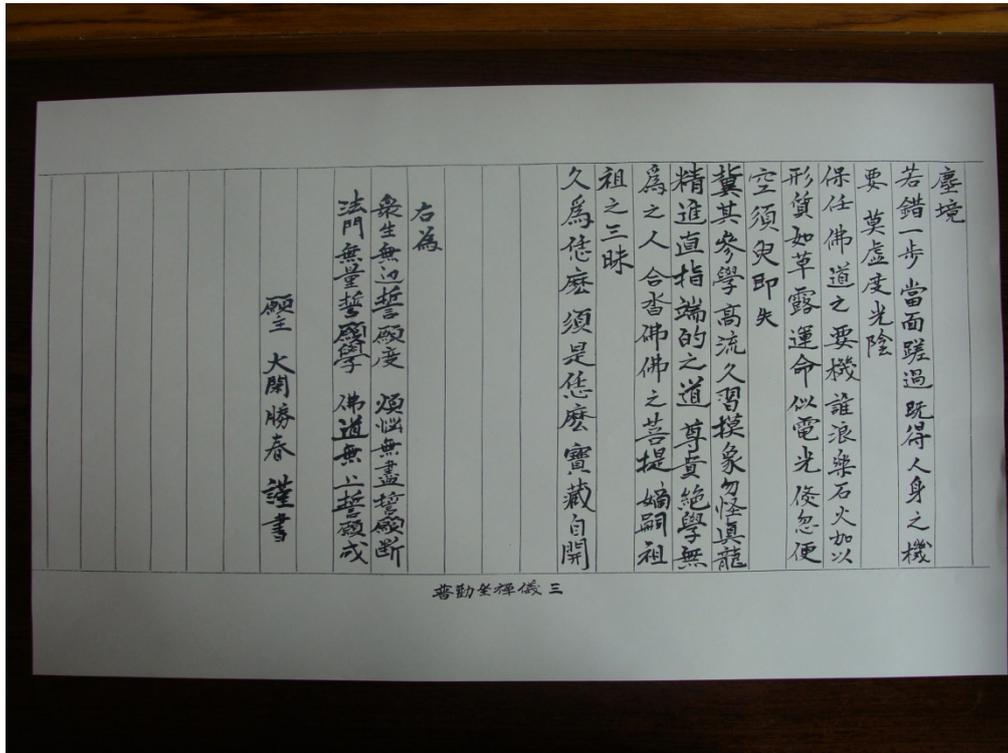
然則不論上智下愚莫簡利人鈍者專一功夫正是辨道修證自不容汚趣向更是平常者也

凡夫自界他方西天東地等持佛印一檀宗風唯務打坐被礙兀地

雖謂萬別千差底管參禪辨道何拋却自家之坐牀護去來他國之

普勸坐禪儀 二

普勸坐禅儀 三



「大宋紹定のはじめ、本郷にかえりし。
すなわち弘法救生をおもいとせり。
なお重擔を肩におけるが如し。
しかあるに弘通の心を放下せん、
激揚の時を待つ故に。
しばらく雲遊萍寄して、・・・」

(弁道話)

そして、初めて認めたのがこの普勸坐禅儀です。
正法ここにありと声高々にお示しなさいました。

正法眼蔵・現成公案 一

正法眼蔵 現成公案

諸法の佛法を時節すなわち迷悟あり
修行あり生あり死あり諸佛あり衆生あり
萬法ともにわれにあやむる時節迷悟
悟なく諸佛なく衆生なく生なく滅なし
佛道もより豊饒より跳出せる故に生滅
あり迷悟あり生佛あり然もかくの如くなり
と雖も花は愛惜に散り草は棄嫌にお
ふるの如なり

自己を運びて萬法を修証するを迷とす
萬法道みて自己を修証するは悟なり
迷を大悟するは諸佛なり悟に大迷なるは
衆生なり更に悟上に得悟するは漢あり
迷中又迷の漢なり諸佛の正しく諸
佛なるとは自己は諸佛なりと覚知する
ことを用いずしかあれども証佛なり佛
と証してもゆく身心を拳して色と見取し
身心を拳して聲と聴取するに親しく会取
すれども鏡に影を宿すが如くにあらず
水と月との如くにあらず一方を証するとは
一方はくらし

佛道を習うと云うは自己を習うなり
自己を習うと云うは自己を忘るなり
自己を忘らさしと云うは萬法に証せらるなり
萬法に証せらるると云うは自己の身心および

現成公案 一

正法眼蔵・現成公案 二

他己の身心をして脱落せしむるなり悟
迹の休歇あり休歇は悟迹を長く嘗て
人はめて法を求むるとき迷かに法の辺際
を離却せり法既におれに正位するとき
速やかに本分人なり人舟に乗りて行
くに目と廻らして岸を見れば岸の移ると
誤る目と親しく舟に付ければ船の進むと
知るが如し身心を乱想して萬法を辨肯する
には自心自性は常住なるかと誤るも行李
を親しくして箇裏に帰すれば萬法のわれ
にあらば道理明らか

薪灰とる更に歸りて薪と成るべきたあ
らずしかるも灰は後薪は先と見取すべか
らず知るべし薪は薪の法位に位して先
あり後あり前後ありと雖も前後際断せり
灰は灰の法位にありて後あり先ありかの薪
灰となりぬ後更に薪と成らるが如く人の
死ぬる後また生とならずしかるも生の死に
なると云わば佛法の定まれる慢なり

この故に不生と云う死の生に成らざる法
輪の定まれる佛転なりこゝろ故に不滅と云う
生も一時位なり死ぬ一時の位なり例之は
夏と春との如し冬の春と成ると思わす春の
夏と成ると云わぬなり

人の悟を得る水に月の宿るが如く月滞れず

現成公案 二

正法眼蔵・現成公案 三

水破れず、広く大なる光にてあれど、尺寸
 四水に宿り、全月も跡天も草の露も宿り
 一滴の水にも宿る。悟りの人も破らざる事、月
 の水とわがたがふが如し、人の悟りも聖賢せざる
 こと、滴露の天月を聖賢せざるが如し、深き
 こと、高き分量をべし、時節の長短は大
 水小水と検点し、天月の広狭を辨取すべし
 身心に法もた考観せざるには、法すむに足れ
 りと覚ゆ、法も身心に充足すれば、ひとかた
 は足らずと覚ゆも多し、例えは船に乗りて
 山をこ海に出で、四方を見らば、ただ内は
 のお見ゆ、更に異なる相見ゆことなし、しかあ
 り、この大海内なるにあらず、方なるにあらず
 のこれる海徳尽すべからざるが如し、宮殿の如し
 嬰婦のごとし、ただわが眼の及ぶところ、しばらく
 内に見ゆのみなり、かれが如く、萬法も又しかあり
 塵中格外多く、様子を帯せりと云えども
 参学眼力の及ぶばかりと見取全取るなり
 萬法の家風をまかんには、方内と見ゆるより
 外にのりの海徳山徳多く、極まりなく
 四方の境界あることを知るべし、かたはりのみ斯くの
 如くあるにあらず、直个も一滴もしかあらず、知るべし
 魚水を行くに行けども水の際なく、高空を
 飛ぶといへも空の際なし、しかあれども、急、息
 未だむせしより、水空を離れず、只用大の時

現成公案三

正法眼蔵・現成公案 四

は使大なり、要小の時、は使小なり、斯の如く
 して、跋に、辺際をたえずと云う事なく、
 処々に踏縁せずと云う事なしと、雖も鳥や
 空をいれば、心は死す、魚も水をいれば、心
 ちに死す、以水為命知りぬべし、以空為命知り
 ぬべし、以鳥為命あり、以魚為命あり
 以命為鳥なり、以命為魚なり、こ外さら
 に、道歩あり、修行あり、その寿命命者あ
 ること斯の如し
 しかれども、水と空の究めてのち、水空を行
 かん、と擬する、鳥魚あるんば、水にも空にも道を
 うべからず、ところをうべからず、このところを得
 れば、修行本従いて現成公案す、この道と
 得れば、この行李従いて現成公案なり、この道この
 ところ、大にあらず、小にあらず、自にあらず、他に
 あらず、先よりあるにあらず、いま現するにあ
 るんば、教にかの如くあるなり、しかあるが如く、人
 をも、佛道を修行するには、得一法、通一法なり
 過一行、修一行なり、是にところあり、道、通達
 せむに依りて知らざる際、の知らざるは、この知ること
 の佛法の究了と、同生、同生、同生、同生、同生、同生、
 得んことを、自己の知見となりて、意知に知ら
 れんことを、留うこと、莫れ、証、究、達、やかに、現成
 すと云えども、密有、ひらきしも、現成にあらず
 見成、これ何ゆなり

現成公案四

正法眼藏・現成公案 五

赤岩山宝徽禅师 扇と使う曰に 僧来りて
問う、「凡性常住 無処不同なり 何を持てか
更に和尙扇と使う。」

師曰く、「汝た凡性常住と知りてと未だ
とてわとして 受らすと云うことなき道理と知らず
と 僧曰く、「如何せんがこれ無処不同の道理」
時に師扇と使うのみなり」

僧礼拜す

佛法の証驗 正依の活路 それ斯の如し。
常住なれば 扇と使うべかつす 使わぬ折も凡

とまくへきと云うは 常住と知りて 凡性は
も知らぬなり。凡性は 常住なるが故に
佛家の曰は 大地の黄金なるを 現成せしめ
長河の蘇酪を 参熟せり
正法眼藏 現成公案

右為

願此功德

普及於一切

我等与衆生

皆共成佛道

願之 興雲勝春 謹言